

統一

第九十九號要目

- 日蓮上人の釋迦牟尼佛觀(下)
 - ▲日蓮と軍事
- 大恩教主を忘る可らず
 - ▲戰爭的文字は一の巧美文(日蓮の)
- 日蓮大聖人(第九回)
 - ▲日蓮の敵は如何なりし
- 字學研究大會に負
笈せる諸士に望む
 - ▲日蓮は怒るものに非ず
- 統一讀者會の光景
 - ▲宗教革命の日蓮は果然強者なり
- 人間の眞價を墜す勿れ
 - ▲隨聽小記
- 第二回宗徒大會議事録
 - ▲四教區をより、與門派の殘黨取方附始末等
- 中央團友會廣告

團告

(毎月補助金に付)
本誌全國各停車場待合室備付に對し其舉を賛し毎月補助金を
申込せし奇特家は左の如し

岡山 久城茂太郎殿
姫路市 中村福藏殿
東市 中藤金太郎殿
神戶市 齋藤金太郎殿
吳市 木村孝殿
品川市 大島良太殿
岡山 篤信會幹事殿

千葉縣内左の各區本誌購讀料集金の義今般左
の各師へ依囑候間何卒諸師の内へ御拂込被下
度願上候也

第三教區 長生郡押日來光寺 山田日廣師
第四教區 全郡澁谷行光寺 前田日應師
第六教區 山武郡清名幸谷東光寺 草切榮玉師
第七教區 全郡御門妙善寺 飛山日甫師
他教區は追て依囑人名報告可致候

統一團

本團發行の法の鼓を施本せよ、布教雜誌として
は恰好のもの也、委細廣告にあり

一本誌代金不納の諸君は至急御送金ヲ乞
一雜誌交換、寄稿共移轉先へ願升

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊八錢十二冊前金八十六錢廿四冊前金二圓七十錢郵券代用は一割
増但五厘切手を具さず
一購讀申込の節は住所姓名を階書にて認めらるべし
一爲替局は遠草區北松山町として御振り込の事
一本誌は別に領收書を發せし但し領收證を要する向は返信料を封入すべし或は
爲替振込の節拂渡通知料紙錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰毎一行金八錢なり

明治卅六年六月十五日印刷發行

發行人 井村恂也
編輯人 山根顯道
印刷所 鈴木暉學
北澤活版所

東京市淺草區南松山町四十五番地

發行所 統一團

(明治三十一年二月廿四日) 第三編(團友會) (明治三十一年七月十五日發行) 第九十九號 每月一圓十五日

大恩教主を忘る可らず

日蓮の立義の尊きは法華經の尊きから也、法華經の尊きは本佛の顯示即ち顯本の有るから也、顯本あつて眞の一念三千も成立し皆成佛道も定立するにあらざるや、佛の本赫明かならず、隨て佛の慈悲絶大ならずんば、何すれど法華經尊重すべけんや日蓮の主義も亦凡俗ならくのみ、頃日蓮門下一二の道俗あり、盛んに日蓮上人を鼓吹す、其鼓吹するや元この理に準せるものならんも、其言は恒に聖日蓮に偏して本佛を輕んずるの傾きあり、爲に其之を學ぶものに至つては、もすれば聖日蓮を知つて大恩教主釋迦本佛を念はず、甚太しきは但日蓮一人の觀念にすら座するものあり、嗚呼痛嘆すべき事ならずや、是れ所謂學佛法の外道に近きもの、日蓮上人に方人して却て上人を泣かしむるもの、法華經を讀めて還て其心を殺すもの、教主釋迦世尊の大罪人たらんとするものならずや、願くは日蓮上人の流義に遊泳するものは、須く法華經顯本釋迦世尊妙法を以て常に吾人を救はんとなし給ふよしを信じ、かくて我等は之れに救濟せらるゝものなれば此勅使として开を弘通せしめ給ひしよしを信じ、かくて我等は之れに救濟せらるゝものなれば此に日蓮上人の恩恵を知ると同時に、更に一段と教主釋尊の大恩恵を念はざる可らず、釋迦大恩教主をさしをいて、獨り日蓮上人を難有かりたればとて決して聖人の悦び給ふ道理あるべき筈なきのみならず、遂に本佛違背傍法墮獄の罪過を作るべきことあらん、必ず心すべき事ならんと存す一言を取てすと云ふ……(忍水)

統一主義

日蓮上人の釋迦牟尼佛觀

下

釋迦中心論に一轉したる日蓮上人の佛陀論は佛教發達史上に於ける有數の出來事たり、吾人は先順序として日蓮上人が教相論より壽量品神髓説を主張せられたるを見ざる可らず、惟を「藥王品得意抄」に見るに、「壽量品の時は迹門の月未だ及ばず、何に況んや爾前の星とや、夜の星の時月の時は衆務を作さず、夜明れば必ず衆務を作す、爾前迹門にして猶生死離れがたし、本門壽量品に至て必ず生死を離るべし」と、かくて壽量品は一代經に於ける日の光ある經典となれり、日の光、月の光、星の光、るは終に光力に強弱あり、斯の如きは壽量品が佛界の無始無終と顯本したるに即して、九界の無始無終と顯本したるに在りて存す、一は顯勢存在として顯本せられ、一は潛勢存在として顯本せらる、「開目抄」に否定的に壽量品を以て天の日月に譬へ山河の珠に比したるも、將亦「觀心本尊抄」の五重三段に於て壽量獨尊説を記述せられたるも、要するに釋迦牟尼佛の久遠實成、佛界の無始無終、九界の無

始無終が、壽量品に於て顯現呈露せられたるが故ならずや、然り日蓮上人が教相論に於ける壽量品神髓説の眞意は、實相論に於ては宇宙事觀論顯れ、佛陀論に於ては歴史的人格的の釋迦牟尼佛が一轉して宇宙事觀論と相交渉して高大深遠なる宇宙論的釋迦牟尼佛と顯れ給ふ點に在り、かくて壽量品の教相は日蓮上人の釋迦牟尼佛觀上極めて意義ある教相となれりき、さればにや、日蓮上人は此壽量品の教相を以て、即ち久遠實成を以て、佛教に於ける雜多の佛陀を解釋し、佛々相對論の間に立ちて獨り釋迦絶待論と主張せられたりき、「開目抄」に「然善男子我實成佛已來無量無邊百千萬億那由陀劫等云云、此文は華嚴經の三處の始成正覺、阿含經の初成道、淨名經の始座佛樹、大集經の始十六年、大日經の我昔坐道場、仁王經の二十九年、無量義經の我先道場、法華經の方便品の我始座道場等を一言に大虛妄也とやぶる文也」と、先斷じ來りて、久遠實成と始成正覺とは、佛身の上に於て無常身と常住身の差異ある事を顯し、即ち華嚴、阿含、淨名、大集、大日、仁王等の經典に現れたる佛陀は假象的一時的無常身にして、壽量品の釋迦牟尼佛、獨り實在的永劫的常住身なりといひ、更に「此過去常顯る、時、諸佛皆釋尊の分身也、爾前迹門の時は諸佛釋尊に肩を並べて各修各行の佛也、かるか故に諸佛を本尊とする者釋迦等を下す、今華嚴の臺上、方等般若大日經等の諸佛皆釋迦の眷屬也」と論したり、

然り久遠實成は過去常あり、釋迦牟尼佛は過去遠々より未來永々に亘りて常住身の佛陀也、釋迦と大日との相對佛陀と釋迦との相對は、そは各修各行の場合也、今や久遠實成、過去常住、無始無終てふ、あらゆる真理の異名は、相對論に在りし釋迦牟尼佛を能く絶待論の上に引き上げたり、更に「日眼女造立釋迦佛供養事」に就て見るに「法華經壽量品云或說他身等云云、東方の善德佛、中央の大日如來、十方の諸佛、過去の七佛、三世の諸佛、上行菩薩等、文殊師利舍利弗等、大梵天王、第六天の魔王、釋提桓因王、日天月天明星北斗七星二十八宿五星七星八萬四千の無量の諸星、阿修羅王、龍王、天神、地神王、山神、海神、宅神、里神一切世間の國主とある人何れか教主釋尊ならざるや」といへりや萬有佛身論を打混じたる説明なれども、若一步實相論の道程より解釋し來れば何等の苦心も要せざるべく、佛教に於けるあらゆる人格論に向て綜合主義をとりての斷案は、吾人之曰日蓮上人の佛陀論に於て始めて見得べきものと信する也、

願ふに印度に於ける歴史人格的の釋迦牟尼佛は、日本に於ける日蓮上人の佛教に入りて今や世界的普遍的の釋迦牟尼佛となり給ひき、かくて世界的普遍的となると同時に、遠く歴史と離れ、人格と離れ、益々神格的に宇宙論的に其佛陀觀は一轉し去らんとす、佛々相對論の重を離れて釋迦絶待論に入りし上人の佛陀論は、勢ひかくならざる可らず、然り勢ひかく

の教系にも傳へず、天台の教系にも述べず、佛滅後に於ける哲學的思辨の必要に應じて宇宙觀の變遷發達するに連れて、空海、天台、澄觀の徒、各一家の宇宙觀を築きしと雖も、未だ日蓮上人の如く彼の時は理なり今の時は事也、若くは觀念既にささるゝがゆへに大難色ささるといひて、宇宙事觀の大哲學を建設したるものはあらざる也、かゝる宇宙論の範圍より續釋し來る三身論は亦從來の三身論の比にあらず、即ち釋迦牟尼佛の體は事法身也、釋迦牟尼佛の相は事報身也、釋迦牟尼佛の用は事應身也、体相用の三者は事智慧の三者也、事智慧の三者は境智用の三者也、境智用の三者は法報應の三者也、法報應の三者は一釋迦牟尼佛の三德也、事觀の妙境は法身の第一德也、事觀の妙智は報身の第一德也、事觀の妙用は應身の第一德也、絶待境、絶待智、絶待用の三者一体の釋迦牟尼佛は、明白に宇宙論的釋迦牟尼佛になり給ひき、見よ法報應の名は如何に其意義を轉換せられたりしぞ、法身常住論を以て唯一の特色としたる從來の三身論は今や明白に破壊せられたりき、法身の無始無終はとけども未だ報身應身の根本はとかれずと日蓮上人が道破せられたるも、宇宙論的釋迦牟尼佛の佛身常住論より來りし事を知らざる可らず、

小なる釋迦牟尼佛は今や大なる釋迦牟尼佛となり給ひき、歴史的釋迦牟尼佛は今や超歴史的釋迦牟尼佛となり給ひき、國民的釋迦牟尼佛は世界的釋迦牟尼佛となり給ひき、而

ならざる可らざる也、何となれば釋迦絶待論の眞意は佛教に於ける諸佛統一論にあり、神格的の佛陀、宇宙論的佛陀、大日彌陀樂師等は正にそれならずや、此等の佛陀を統一する中心佛は神格的宇宙論的の二面とも相携へてより一層高きものたらざる可らざれば也、

佛教に於ける諸佛統一論の歸着としての釋迦絶待論即ち釋迦中心論は、今や久遠實成、過去常住の二つの名の下に佛教に於ける分裂せる多神を綜合し歴史的人格的の小なる釋迦牟尼佛は超歴史的越人格的の大なる釋迦牟尼佛となりつゝ實相論の範圍に入れり、即ち宇宙論的宗教的教主の釋迦牟尼佛とならんとせる也、吾人は今や彌陀三身論、大日三身論が、眞言教系の不空、一行、空海、及び淨土教系の龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空、親鸞等が終に一時の佛教解釋の誤れるより來りし結果なる事を覺ゆると同時に、最初印度に於て馬鳴が企圖したる、佛の御身を解釋せんとして起りたる法報應三身論が、佛教に於ける教祖の御身に約して今正に解釋せられ繰返されるに到りしは、實に諸佛統一論の基礎に立ちたる日蓮上人の釋迦中心論の結果なりと覺ゆる也、

日蓮上人の三身論も今まで佛教の歴史が繰返したるものと同じく實相論の上より續釋し來らざる可らず、日蓮上人の實相論は宇宙事觀論なり、今一つ言ひ換ふれば事象融合觀也、斯の如き實相論即ち宇宙觀は、華嚴の教系にも入らず、眞言

して更に哲理的新系統に入りて三身常住の釋迦牟尼佛となり給ひき、されど斯の如きは釋迦牟尼佛の名ありと雖も、殆んど佛陀其人の廣大微妙なる宗教的精神を見る事能はず、別言すれば教主的本能を見る能はず、若夫斯の如くにして止まらんか、釋迦牟尼佛とは唯宇宙論的に常住佛身なりと憧憬するに止まりて、更に宗教的教主的本尊的に解釋する能はざるの連に際會せざる可らず、是豈三身論の眞意義ならむや、茲に於てか九界も無始の佛界に具し、佛界も無始の九界に備て、眞の十界互具、百界千如、一念三千の成立する實相論上に於て佛界を大統の三千となし、九界を各統の三千となし佛界を能具とし、九界を所具とし、佛界を主具とし、九界を伴具とし、釋迦牟尼佛を以て佛界の本主となし大統能具の三千たりしめざる可らず、釋迦牟尼佛の宗教的教主的本能は十界に於ける佛界主具論に入りて始めて呈露せらるゝ也、かくて空間的實相論の一面は時間的緣起論と轉じて佛界緣起論を生み、哲理に傾きたる宇宙論的釋迦牟尼佛は慈悲を以て充たされたる救主的釋迦牟尼佛となれり、

見よ眞言の教系に入れる大日三身論は餘りに宇宙論的佛陀論に偏せずや、更に彼淨土の教系に入れる彌陀三身論は餘りに救主的佛陀論に偏せずや、願ふに馬鳴に依て一たび唱へ出されたる佛陀三身論は初めは純哲理の系統の下に常住を描きしかども、時代の要求、思想の推移は、亦更に救主的に佛陀

を描き出したりき。今や吾人が日蓮上人の佛陀論を觀るに、純哲學系統の宇宙論的佛陀觀と、純宗教的系統の救主的佛陀觀とを能く綜合して、是を一教系の下に統一したるの觀あり。即ち空間的實相論たる宇宙事觀論の上よりは宇宙論的釋迦牟尼佛を憧憬するにわらずや、將亦時間的緣起論たる佛界緣記論の上よりは救主的宗教的釋迦牟尼佛を憧憬するにわらずや。宇宙事觀論は大日三身論の根底を爲せる即事而真觀を攝せずや、佛界緣起論上の慈悲は彌陀三身論の慈悲を攝せずや。夫然り日蓮上人の釋迦三身論は終に大日三身論の上に出で、彌陀三身論の上に出で、哲學的系統の佛陀格としても、宗教的系統の佛陀格としても、殆んど三身論上の絶頂に位せり。

日蓮上人の釋迦牟尼佛觀は、教相論に於ける善量品神髓說より、轉して釋迦久遠論に入り、更に實相論に於て久遠論の場合に於て絶待論に入りたる釋迦牟尼佛を以て佛界の本主とあして、以て能く人格的御名を失はずして宇宙論化し救主化したたりき。釋迦牟尼佛の御身の解釋が種々に遷り轉じたれども、能く原始的人格的御名を失はざりしは、日蓮上人の釋迦牟尼佛觀に於て特に注意すべきもの、一也、是主として教相論に歴史的價值を付與しての結果に外ならざる也。かくて佛界緣起論の上より釋迦牟尼佛を十界の本主となす時は、釋迦牟尼佛は一念三千の主躰なると同時に宇宙の主躰

文ぞや、

日蓮上人の釋迦牟尼佛觀は其本尊論に入りて正に絶頂に達せり、隨て其三身論も縦横の妙致を極めたり、吾人は前來上人の釋迦牟尼佛觀を論じ來りて上人が佛教古代の歴史に影を斷ちたる釋迦三身論に多大なる想を運び、他の粉々たる佛身論に驚心せずして、能く原始佛教よりの秩序を追ふて、釋迦牟尼佛のみ名をして長へに輝かさしめ、一生の大建設たる本尊論に迎へ入れて、以て釋迦三身論の歸結を告げ給ひたるは、佛教に對する忠實なる働作といはざる可らず。

嗚呼、迦毘羅城は亡びたりき、父王は逝きぬ、寵姫は逝きぬ、されど宗教的天才たる、迦牟尼佛は、教主となりつゝ、世界の到處に精神的王國を築きて、其神權を振ひつゝ、わらずや、

偉なる哉、夫、大なる哉、

(下終)

此稿は當時大藏に入りて「佛滅後に於ける佛身論の發達」を研究中の一節也、精研の上更にいふ處あるべし。



也何となれば一念三千を離れて宇宙なければ也、されど一念三千は妙法蓮華經の五字也妙法蓮華經の五字は釋迦牟尼佛の五字と同意義なるか、然り一念三千は妙法蓮華經ともいひ得べく、亦釋迦牟尼佛ともいひ得べし、此場合に於ける妙法蓮華經も、釋迦牟尼佛も、共に三身の異名にして、其南無妙法蓮華經と唱ふる時は事法身如來を憧憬するにわらずや、其南無釋迦牟尼佛と唱ふる時は事應身如來を憧憬するにわらずや、單に事法身といふと雖も一身即三身也、單に事應身といふと雖も、一身即三身也、「三大秘法抄」に「善量品に建立する本尊は五百塵點の當初己來、此七有緣深厚、本有無作三身の教主釋尊是也」といひ、「御義口傳」に「無作三身の寶號を南無妙法蓮華經といふなり」といふは、二文相俟つて前者後者の意義を顯さずや。

依て思ふに釋迦牟尼佛本尊論も、妙法蓮華經本尊論も唯其名を異にするまでの事にして、一は時間的緣起論上より慈悲ある教主として南無釋迦牟尼佛と呼び奉り、一は空間的實相論より哲理ある教主として南無妙法蓮華經と唱へ奉る。一は本住法より入り、一は自證法より入り、一は理性より入り、一は感情より入り、而も妙法蓮華經も三身也、釋迦牟尼佛も三身也、一は事法身をよび、一は事應身をよぶ、其結果は互ひに一身即三身に入りて圓融無礙也、無作三身の釋尊、無作三身の寶號とは、如何に兩者を巧みにいひ顯したまひたる御

各面評論

右の數文字は研究的態度と以て認めしもの請ふ不審する勿れ

日蓮と軍事

假令其言ふ所は千百言に對する一片言にもせよ、其探つて味あり價あるものは宜敷尊重熟味すべき也、日蓮の遺書多く消息文なりとす、されば同一筆方のもの殊に多しと雖之れが爲めに更に趣味多き一言を打消す可らざるなり

予輩は思惟す、日蓮上人の主義は各面に對して最も圓熟なる調和論ありしを、其文學に其政事に其國躰に其他萬般の事に調和論の筆端窺ふに足るべきものあり、然らば軍事に於ても決して其論議の露れざることをあらんや、予輩は上人の遺文に驚くべき一文を發見せり何ぞや一定ヲ有テ御尋ニ軍ノ僉義ヲモ云合セ調伏ナンモ仰付ラント思シニ云云云云是なり、由是觀之ば日蓮は其自己の教義上の大普及を計らんとすると同時に、身は天下の政權者と惟幕に連り一堂に膝を合せて以て軍議をも上下せんとせしならん、軍の僉議をも云ひ合せとは宗教家としては實に思ひ切つたる事ならずや、是れ元兵外寇のありて國家存亡のつながるところ、眞乎愛國心のあふる

もの然るべき事かとも見ゆれども、淺慮其深意を量るべからざるものあり、とは云へ請ふあやしむ勿れ天海の隠助は徳川三百年の太平ありしなれば。

戦争的文字は一の巧美文(日蓮の)

日蓮を研究し之を世に紹介するの人、ヤ、もすれば渠を兵に將たるの失敗家となし政治的野心の失望者となす、予何が故に人の斯く渠を見るやと考ふるに、开は遺文上に現れたる渠の筆勢が處々に於て或は譬を兵に借れるが故也。其「カ、ル時刻に日蓮佛勅を蒙て此土に生れけるころ時の不祥なれども法王の宣旨背し難ければ經文に任せて權實二教の軍を起し忍辱の鐘を着て妙教の劍を提げ一部八卷の肝心妙法五字の旗を指し上げ未顯眞實の弓を張り正直捨權の箭をはげて大白牛車に打乘て權門をかつばと破り彼處へれしかけ此處へおしよせ念佛眞言禪律等の八宗九宗の敵人を責るに或はにげ或はひきしりぞき或は生取られし者は我弟子となる或は責め返し責め落しすれども敵は多勢也法王の一人は無勢也今に至つて軍やむ事なし法華折伏破權門理の金言なれば終に權教權門の輩と一人もなく責め落して法王の家人となし云云」の如きは有名なるものにて其他或は「日本國中日蓮一人西戒可調伏者也」或は「圓にて候也念佛者は數千人萬人の方人多く日蓮は唯だ獨り方人は一人も之れ無し今まで生きて候は不思議也」或は「法華經の敵をば責め」或は「敵有る時は刀杖弓箭を持つべし

日蓮の敵の如何なりし

弱きものはより弱き者を墜し入れんとするは古今一徹也、上に諛るものは下に諛らるゝを喜ぶと同規なり、而して亦弱きものは自ら平和主義と稱して強者に對す是れ畢竟防禦的武器に過ぎず、憶病者の意外に開戦論を主張するが如し、彼の野犬を見よ、自己より弱者と見てとりたる瘦犬には猛然として怒りを示せども一度自己より強きものと知らば尾を卷き首を垂れ殆ど白旗をかゝぐるの狀也、彼の〇〇を見よ三國に恐怖して義をまげ是れ平和の局なりと云ふ、日蓮の時渠れは教義的には強かりけれ腕力には最と弱かりき、敵は天下の執權渠は味方なき只一の平僧なり、此時や海内の諸宗僧侶の態度はいかなりけん、嗚呼彼等は卑劣なる野犬の態度なりき腕力に最も弱者たる日蓮に對しては甚しき隱險手段を執りたり、日蓮の大難數知れずと云ふも畢竟是れが爲也、嗚呼彼等は〇〇の平和主義なりき、平和主義を口にして日蓮の激しき教義上の砲筒をさけたり、宜なるかな「畜生の心は弱きを墜し強きに恐る當世の學者等は畜生の如し」と罵倒され、「日蓮程の師子王」と誇揚されしもの亦奈何ともすべからざる也野犬の態度は自れ畜生なるから也、義をまげたる彼の平和主義は果然日蓮の強者なりしを證する也。

日蓮は怒るものに非ず

日蓮の諸宗折伏を以て政權壓伏の反動的怒りに出たるもの

云云」之れに類するの言各所に散見せるを以てなり、然れども之等は皆弘法上に於ける巧例言のみ、ツマナリ鎌倉文學の餘響としての日蓮文學の面影なり、斯の如く露骨なるものには於て吾人は別に趣味とやさしみとを運びて讀まむとする者也。

宗教革命の日蓮は果然強者なり

日蓮は宗教の革命者にして而して革命は、戦争主義なりとすれば、日蓮の一动一靜は即ち大戦争たらざる可らざる論ありき也、戦闘の敗は弱者にありとすれば革命の成好も亦勝者たらざる可らず、日蓮が其時代に於て革命の好果を奏せんとし、宗教戦争の平定者たらんとせば、勢自己の力量の如何なるかを知るべき也、「臥伏強敵始知見大力」とは渠れの理想ならずや、而も自ら其大力量を以て任する也、斯に於て宗教戦争の平定者たる渠の眼底に映するところの諸宗派の敵は悉く是れ弱者たらざる可らず、然るにたま〜其力の弱きものは力量以外に一種の術を施さざる可らず是れ止を得ざるの手段なり其當時に於て「彼等程の蚊虻者に日蓮程の師子王」の力量の差これありとせよ、比較的正直なる時代なりとも未法濁惡には漏れざる鎌倉時代の諸宗法師は、必ずや種々なる手段を以て強敵日蓮に對せざる可らず、果せる哉大難小難誹謗罵言は渠れ五尺の一身に激浪となり怒濤となりて襲ひ來る、斯に於てか知んぬ日蓮の宗教的戦争に於て最強者なりしことを、然らば渠は確に當時の宗教改革者たりしや疑あらざるべし。

なりと評するものあり、渠は正義の爲には怒りたるなるべし、されど渠は政權壓伏の反動的怒りを起すほどの憶病者にあらざりき、曰く「是れ怒れるに非ず正法を惜む心の強盛なるべし怒るものは必ず敵に値て恐るゝ心出來る也」と若し日蓮の眞面目を窺はんとせば渠の怒れりと見ゆるもの即ち平靜なりと見へざる可らず。

宗 茲 文 學

日蓮大聖人

(第九回)

佛城 關 田 養 叔 講演

久しかりで故郷房州に歸りましたる連長法師、先づ小港に御兩親を訪ねて、親子ともに喜びの間に、鎌倉の話など、問ひつ問はれつ色々物語り、それより清澄に登り、御師匠道善に面會を致し、久々の挨拶に互に、恙を喜び、其の内に弟子仲間や知己の人々も参りまして、この四五年間鎌倉に於て淨土宗や其の外諸宗の教義、學者の狀態、一般佛教者の様子或は古今の名僧知識の是非等、連長師自ら見たり聞いたり致したる事をも一々に物語りますれば、會て同じ學びの窓に勉強を致しましたる兄弟子の淨顯、義淨、連長師を子供の頃から譽めて居た二間寺の道義法師、此の外青蓮明心等の同寮

の所化僧が、同じ座に列つて居た中にも殊の外威服を致し、
運長師の學問の著しく上達した所と云ひ、近頃耳新しき談し
と云ひ、其れに亦、水の流れるが如き爽やかなる辨舌といひ、
皆膝を打つて驚きました。

是れより暫時の間、此の山に止まる内に、戒徳即身成佛義
といふ書物を書き著し、山内の人々に説き示しました。こ
れが日蓮大聖人が書物を御書きになりました初であり、
時に仁治三年御年二十一歳であつた、此の書物の大體は、佛
法の中の大乘小乘法華真言の戒行の相と説かれたのである
が、然し真言宗の戒行だけは略してあります、大體此の當
時は真言宗であつたのですから、重もに真言の方に肩を持つ
て書いてあります。

斯様にして閑寂なる山寺に氣力を養ふて居りましたが、元
より書物にも乏しく亦自分よりも學問の勝れた者も居らず、
亦俱に道を語り合ふ人もないといふ譯であるから、今や飯を
たる者の食を求むる様に、渴したる者の水を欲する如くに、
學問修行に熱心して居る運長法師、とても此處に靜かに落ち
ついて居る譯には行きません、乃で、これより再び諸國に遊
學を致し、大に我が智能を磨かふと決心致し、この度は京都
の方面へ出立することになりました、それは音に聞かぬし比叡
山は申すに及ばず、三井寺東寺の西南南都の六宗の如き、中
々に盛んなるもので、其の宗々の祖師開山と云はれる人々は

、唐天竺までも渡られて佛法を求め、難行苦行を積んだ靈蹟
であるに依て、定めし經論の類も澤山あるであらふし、亦名
僧知識も居られるであらふから、是等の山々寺々を遊歴して
大に佛道の底を窮めんと致したのであります。

實に聖祖日蓮の如きは偉孫お方といはねばならん、その見
識からいへば、當時既に學問は大跡に於て出来上つて居つた
方である、又、自分の信する所も定まり後來の運動の方針も
路胸の中に分つて居たのである、それは是れまでの萬事の御
様子で知れます、然るに斯くも學問に篤く志を注がれると
云ふものは、餘程佛道の爲めに法を求むることの御熱心なる
と親切なることに感服せねばならん、當今の人々が一年か二
年も佛學を學んで、それで學者を氣取つて居る様な半可通學
者は大に耻づべきである。

運長師は、房州を出で鎌倉に立ち寄り年來親しい人々を尋ね
ますが、時に北條泰時は世を去り、其の嫡孫たる四郎經時が
武藏守と爲り鎌倉の執權職と相成りました。
此の頃は國中は天災が頻りに起り、天空に赤と白の氣が顯
はれ、火柱が立ち、夫れから大地震で鎌倉府内の大小名の邸
宅堂塔伽藍なども夥しく揺り潰され、火事が所々に起り、か
て、加へて、一兩年の間は時候も順を失つて五穀も實らない
で、百姓町人悉く難儀を致して居ります、運長師は斯る有
様を見て、如何なる世の行末となるであらふかと獨り歎息を

いたしました。

さて五六日の間鎌倉に逗留をして居ります間に計らずも
比叡山の學僧尊海といふ人に出遭ひ、互ひに語り出づる御法
の道に交り結び、種々と佛法の事を論議いたしましたすれば、
年來交際つた友達の様な心持かいたしました、運長師は尊海
に向ひ「拙僧も、この年月佛法修行に心を盡し、色々と學問
も致しましたが、是非この度は叡山に佛法を尋ねたい志願で
ある、互に盡す法の爲め、何卒尊公にて萬事便宜を得られる
様御取計ひ下さるまいか……」と赤心こめて相談すれば、尊
海も大に喜び「其の御志願誠に結構な次第である、拙者は座
主信尊の弟子で、不學の某なれど人は叡山の四俊の一人に數
へるとか……」此の度法用あつて鎌倉の御所まで参つたもの
であるが、用事も済み近々に歸る都合である、見受け申すと
ころ御話の様子、殊の外才學の御方と察し致す、遠慮なく
拙僧と同道にて叡山に登りなさい、及ぶだけの力をば御添ひ
申さん……」と親切なる談しであつたから、運長師は、關
夜に燈火渡りに船、願つても無き好都合と、直に尊海に同
伴を致し、遠き旅路を辿りまして、漸く叡山の麓、阪本とい
ふ所に着き、其れより山に登りました。



紅蓮白蓮

宗學研究大會に負笈せる諸士に望む

清瀬 貞雄

田中智學先生の指導に係る、宗學研究大會なるものを大阪の
立正閣に開かる、其目的也大且高、而して其方針也明晰、其
用意也周到、宗教界近來稀に觀る所のもの、沈淪萎靡の宗教
海、亦一活潑を加へ来る、吾人は多大の敬服を拂ふに價ひす
るものなるを覺ふ、

然り而して、其大會に来れるの人、多く熱烈至信、彼の飽食
暖衣の徒と、日を同ふして論すべからざるは言を待たず、吾
人之を其事實に聞く、其茲に来れるの前、及其茲を去れるの
後には四圍皆魔障たらざるを得ざる也と諸士は多くの困難に
打ち勝ちて、この活學に出てたるものなるを知る、然らば則
ち、諸士が大會を去りて各任處に歸れるの日、亦多くの困難
に打ち勝ち、大なる魔障と戦ふの勇氣あるは、これまた吾人
の疑はざる所、否な疑はんとして疑ふを得ざる所なり、

又聞く、來會の諸士中には、僧侶其八九の多きを占めりと、
聊か人意を強ふするに足るものあり、
干斯於て乎、諸士の責任の重且大なるを知る、何者、諸士が

大會に來るの其以前にありては、吾人之を忌憚るく脱白に云へば、諸士は普通人たり、諸士は平凡人たり、また諸士は埋木の人たるなり、一朝猛然として魔濤を蹶り、奮乎として障岩を排し來てよりの諸士は、亦其以前の諸士にあらざるなり、蓋し諸士は敵多しと雖も、諸士に向ひ同情を以てして歡迎するものも亦天下少からざるべし。

見よ、天下乱れて忠臣良相の出づるあるを待たんことを、又見よ、家門貧ふして良妻賢婦を思ふの切なることを、諸士よ、諸士が猛然奮乎、百難千魔を蹶り倒して起らし現宗家は、今將た如何なる現狀ぞ、

上は信の對象の雜亂より、中は宗旨内容の廢亂下は宗旨外延の萎靡に至るまで一として諸士が奮起せる原因ならざるものなきを得んや、

悲歌慷慨の志士、古今其軌を一にせり、諸士奮起の原因既に明晰なり、諸士の行動正々たり堂々たり、萬目集注の中にありて、この一大佛事を演ず、豈男兒一世の快事ならずや、

語を寄す、諸士よ、吾人以多大なる希望を諸士の熱誠に屬することを、惟ふに、天下心あるもの等しく、諸士將來の行動に注目凝視して怠らざるのみならず、其行動の宗目的に且公明熱誠にして以て、冷然彼の水の如く、淡然彼の水の如きに至れる、宗門をして枯木回春の想ひあらしむるを待つもの切なるを、

諸士よ、諸士の前途は多大なる希望と責任とを有せり、吾人の特に諸士の記憶して忘れざらんを乞ふ所以のもの他なし、諸士が大會結了の後、各其所に歸れるの時に當り、快刀亂麻、能く其爲すべきを爲し、能く其行ふべきを行ふの事はなりとす。

諸士が研究大會に奮起せる當時の勇氣に鑑み、又大會に來りて活ける信仰の多くを頭腦に印し、又多くの素養を得られし上の諸士なれば、吾人は多大の希望を屬すると同時に、亦秋毫の疑を狭むの余地なしと雖も、人は境遇の奴隸なりと云ふことありとすれば、大衆集台勢力上の諸士と、大衆分散單獨の上の諸士と、其異同を生ずるなきや否やを諸士に對して屬望することの多大なると共に、聊か吾人の掛念するところを脱白に披瀝して、諸士の記憶に訴へざるを得ざるなり、

宗門の前途實に遼焉、刷新を圖るべきの事業多々、而して眞に宗門の公憤に因りて奮起せるもの世に幾許かある、吾人は諸士の壯舉を慶讚し、將來の希望を屬すると共に、諸士の色心二法の健康を祈ること斯くの如し、



人間の眞價を墜す勿れ

武藏 北多麻 毛 見 遷 喬

吾人の所謂社會に於て動物中の最高位置を占むるものは夫れ人にあらずや、釋尊の人間を其中區に置かるゝもの亦所以ありと云ふべし、或人曰人類は理性の動物也有情の動物也愛生の動物也是れ萬物の秀靈なるが故也と、然りと雖吾人は茲に斷言せんと欲す、人として心裏一點の信仰なきものは決して秀靈と云ふ能はずと、何となれば信仰は人の人たる價値を保持せしむべきものなれば也、信仰なきものは假令如何なる富貴智識ありとするも人道の基礎を失却するが故に名は即人たりと雖其實は人間已下也、故に信仰を欲せざるは人間より落せんとする也、畜類に等しからんとする也、即秀靈たるを肯せざるの人なり、然り而して信仰に正邪あり、其正は即良し、其邪なるもの甚しきに至つては人間已下の動物崇拜あり、斯の如きは信仰は之れありと雖畢竟するに無信仰者と何の異なる處なく、同じく秀靈と云ふ能はざるのみならず人として價値なきものなり、并は動物畜類を拜するが故に尅論すれば畜類に同化せんとし人間より落せんとするが故也、嗚呼是れ何ごとぞや或は信仰なくして或は畜類を崇拜して人間已下たらしめんとす之自ら最高の位置を捨つるものならずや、宜敷信仰なきものは正信を生せよ、邪信なるものは正信に還れ

來者不拒

よ、自ら秀靈を以て任ずるもの何すれど理性あるの人が非理の獸類を崇信するや、實に斯の如きは廉恥を重する吾等祖先に對しても最と耻づべきの處業なり、若夫れ信念なきものは袋の裏に包み給へる妙法五字に生信せよ、迷惑の徒は正法の惠日に照らさるべし霜露の消除するが如けん也。

○隨聽小記

南 豫 鼓 の 原 人 (投)

○伊豫宇和島の各宗寺院官同して夏期講習會并に佛教大演說會を開き村上文學博士を懸々三千里外より禮聘し兼て土佐の日蓮宗某僧及軍隊布教師なる遠山某氏等を辨士或は講師の員に例せしめ五日間の官同大會を了しぬ

○これ等の無意味なる會合に恬として五日間廣く舌を弄し非本化的の行動を取つたは日蓮宗入檀林卒業生てふ立派なる肩否資格ある僧侶なり而して其云ふ所は

吾々も宗教研究のものなるが今回村上博士の高説を拜聴し信念の上に有益ならんが爲に土佐より來字せしものなるが當演壇にたつたるは諸君に教ゆるに非ず諸君と研究を共にせんが爲なり

村上博士の高説とは如何其佛教に對する態度は世間に充分明了なるにあらずや然るに彌陀中心論者なる非僧非俗の謗法者の演說の前驟然たるに甘んずる如きは斯くて日蓮聖祖門下の人と、いふべからず且つ其説く所各宗に憚りてか通佛教といふ小六ヶ數も非本化的の狹範圍に蔽られ一言も大聖人の語々明々たる統一主義に及ばざりしは怪しむべきの極なり悲しむべきの甚しきなり

○眞宗の遠山某の演說の如きは寧ろ滑稽の一資料に値するのみ隨自意、隨他意の一新聞を出して譏笑をこまかさんせしは其内心の窮せるを證して余あり可憐なる哉

隨自意とは隨者の問を待たずして佛陀の設法し給ふ所(丸で無問自說の體なり)譬は阿彌陀經の如し此經は佛陀と聽者との對話に非らざるを以て人

に厭意を生じむ故を以て僅の御經に幾十度も舍利弗々々々を連呼して警
醒したり、次に隨他意とは聽衆の間に應じて佛の答へ給ひしを云ふ假へは
無量壽經等の如しは大に趣味あるなり云々

○博士の論議演は漢石日本一の大學者程ありて牛欄り先生共け秩序正しき杯と
連りに稱讃の聲を放ち居れども其裡面を窺ふに於ては釋迦大聖の大罪人たるを免
かれず「わけのほろ」的模倣より流出したる體根本位説は聖日蓮の主義と冰炭相容
れざるは嗚々なり感ふ勿れ

○各宗の現在して各々其宗見を樹立するは恰も此村上前より寫眞に撮り或は後
より或は横よりすると同様なりといふ若しも其寫眞器械が違て破損し居りたり
とすれば如何、彼等の頑迷蓋し深い哉

○御得意の彌陀中心説の如き世に定評あり今略しな、んのみ
附言 住目すべきはこの渴的の佛教聯合會に宇和島にある日蓮宗寺院二ヶ寺の
うち一ヶ寺は初めより權門徒に雷同協力せし一事なり、他の一寺の斷然
同盟に加はらざりしと對照して一奇觀を呈す

統一團報

東作統一讀者會の光景

影山謙二

作東統一讀者會とは我美作の東部に於ける「統一」の讀者六
十八人が平常本誌を閱讀するに就て其領解と趣味との増益を
計り、搗て加て内信交親睦異体同心の實を擧げ、外一般社會

仰と倫理上の明敏なる知識と兩幅相待て進むにあらざるは能
はずと論し、最後に無宗教者は宗教の敵たると同時に倫理の
敵なれば大に法鼓を鳴らして攻めざるへからずと喝破し滔々
數千言、二時間有餘の大演説に廣長舌を振て降壇せらる、次
に津山の信徒を代表して講師と共に出席せられたる、來賓上
田竹次郎氏は「隨感隨演」てふ演題の下に、方今系て麻の如
き我國の宗教界に、本會の如く文書上の傳道と言説の布教と
を契合融和して其間に多大の増益を計らるゝは、宗門前途の
爲め大に賀すべき事なれば、希くは愈奮て益勉められよと勸
奨一番して降壇せらる、次に山名講師は「道德の實踐と宗教
の力」てふ講題の下に十界の苦樂は、三世因果律の可配なる
ことより實相緣起論に説き進み、飽までも道德の根底を宗教
に置かざる可からざる所以を辨明し、最後に信仰は即ち道行
を實行せしむる唯一の心的自制の力なりと斷論し、莊重の態
度、行るに至誠の熱烈と信仰の情火とを以てして、比喻に假
託に説破縱橫、優に二時間以上の大講演に梵舌を振て降壇
せらる、次に原田講師は「比較宗教」てふ講題の下に、三五
千年以前の、東西各國に於ける各宗教の原始的狀態より説き
起して、呪物崇拜、事物崇拜、山川崇拜、巖穴崇拜、英雄崇
拜等幾多の非成立宗教か今尙ほ我日本國民の一部に迷信崇拜
せらるゝを慨嘆し、更に進て是等の蠻的迷信を打破すると同
時に吾か本化 聖祖の顯示し玉へる組織的成立宗教の唯一大
本尊に信仰を捧げざる可からざるを論道し、最後に我國民
の宗教的品性を高尚ならしむる責任は、之れを國民一部の僧
侶にのみ放任すべきものにあらず須らく天下四方の理想あり

に向て宗教的風化の力を普及すべく、瞑暗默契の間に油然と
して成立したる宗教研究の聯鎖體なり、而して其第一回の會
合は勝田郡勝加茂村大字下野田「妙法山經王寺」に開催せら
れぬ、當日講師としては岡山市山崎町本行寺能仁事一師（云
因、師は偶々京都なる本化中央青年會の主任辨士として出席
せらるへき豫定なりしも其を辞して本會に出講せられしは我
等の大に感謝する處なり）津山上の町本蓮寺原田容廣師、同
地弘通所山名木信師の出席を請ひたり、午後一時開會、演壇
の左側面には書家、氣賀荷堂居士か隨喜歸信の結果、丹青を
凝して精細なる令書もて恭く書寫せられたる 聖祖の靈的血
文字、一副の立正安國論を奉掛して會場を莊嚴したり、斯て
能仁原田山名の三講師は、休憩室より出て演壇の左側に同山
々主石川見覺師は演壇の右側に、いづれも各々威容嚴然、主
客相對して列座せられ、壇の正面には、外數の會員および傍
聽者これ亦肅然として整坐したり、此時予は發起人の一員と
して復た當日開催の主任として、徐に繩を壇上に進て開會の
式辞に換ゆべく、會合を催すに臻りたる由來と經歷と趣意と
を簡短に演述し、尙ほ統一團本部より到達したる祝電 並に
林日法翁および光井喜七郎氏より寄送せられたる祝詞慶讃文
を朗讀して降壇したり、式畢れば便ち會員の一人たる農林學
校倫理教授、富田英太郎氏登壇「倫理と宗教との關係」てふ
演題の下に、先づ開口一番、倫理學の定義と宗教の定義とを
擧げ來て之れに詳細なる評論を加へ、進てソクラテスの知徳
同一論を批難し且つ現時教育の實際が餘りに知的に偏するを
嘆き、到底完全なる徳育の實果を収めむには宗教上の温き信

確信ある愛國者か宗家と僧に俱に手を挈て起たさる可からず
と斷論し、叮嚀懇切諄々乎として一時間三十分有餘の快辨と
振て降壇せらる、是に於て少時休憩、津山の信徒井上幾次郎
林伊平兩氏より寄贈ありし七十五個の折詰辨當と、晚餐にと
て一般來會者へ配付したり、喫飯後能仁講師は「統一は佛教
の生命」てふ講題の下に何時もながらの、熱誠なる態度と朗
々の音吐と意氣吞宇宙的元氣とを以て信仰の統一、經典の統
一、本尊の統一、國土論の統一との四大統一論の構想に據て
教相論の上より、將た觀心門の奥底より、説破縱橫、或は經
文を指摘し、或は祖判を引證し以て幾多の文證と道理とに由
循し、緯として公平の見地に立て分烈學派に属する各宗の迷
見、謬妄、迷信を呵責し滔々二時間以上の大講演にシタ、カ
廣長舌を振て拍手喝采聲に降壇せられたり、時既に午後十
時を報しぬ、式順としては方さに夫れより、會員か統一團讀
上の領解談および講師に對する質疑に移るへき豫定なりしも
而も後とに尙ほ特志會員の主唱に係る「懇話會を」催す筈に
て、日没前より既に業に酒肴の準備出來しありければ、固よ
り其を無にすへきにあらず、仍て遺憾ながら一先づ讀者會を
閉會するに決したり、以是各講師は演壇の左側に、山主石川
師は右側に其他すべて開會式の時の如く一同おそろかに整坐
す、此時予は演壇に立て閉會の挨拶を爲し、且つ懇話會に列
せらるゝ人々を除くの外、夫々隨意退散せらるへしと言明し
次て左の結願文を朗讀して茲に目出度閉會を告げたり

統一讀者會第一回結願文

夫れ本化の法門たる也、固も是れ別頭の教觀に風し、佛教統一の中心たり。

加ふるに、聖祖甚深の智慧と甚大の慈悲を以て之れ、判釋を下し、以て其
義趣の在る處を顯示せらる。而して其教化の誠烈なる、其宗風の盛大なる、
傳弘三國の間に於て古今未だ曾て其比を見ざる處也。殊に今や我國の上下各
人、等しく宗教を渴仰して信仰に入らむとするの機運に際し、普く之れを天
下求道の四衆に宣傳し、以て理想の光明界に指導するの適切なるを信す。仍
て茲に統一讀者會を開催し、御門人能仁日統師は「統一は佛教の生命」て法
門を山名木信師は「道徳の實踐と宗教の力」て法門を、原田啓廣師は「比較
宗教學」の一途を、各至誠の道念に住して冤事なく講了し、少く法光啓發の
佳會を現前するを得たるは、一に之れ佛祖の冥導と加護とに憑るにあらず
むばならず。仰き願くは此功徳を以て、正法興隆邪教廢滅、佛日增輝皇道繁
寧、五穀成熟萬民快樂、佛果成就ならしめ玉へ。

開宗六百五十二年夏七月五日

本化優婆塞

發願人 影山謙二 敬白

夫れより能仁原田兩講師（云田、山名講師は、北堂の病氣甚
た氣遣はしきものありしにも拘はらず、北堂か健氣にも祖道
の御爲め是非とも出講せよとの慫慂ありしにも由りつれ、つ
どめて出席せられし次第にてありしかば、師は師の講演を了
るや否や急きく歸津せし也）を始めとして懇話會員一同、杯
盤を抱て席に著し、左右献酬 三行又三行、和氣霽然又蕩兮。
時に予は起て一同に謀て曰く、居常各家に在ては、さづれも
一様に「統一」を友として讀むと雖も、此く一堂に相會して一
乗の縁を結ぶ、而も或は未だ相識らざるあらむ、去れば是よ
り列坐の序次に順ひて、交名の爲に各自信仰の表白、其他す
べて宗教に對する感想と所懐とを述べばやと、一同拍手以て

之を贊す乃ち先づ▲岸本種次郎氏起てり、氏は苦田郡高野村
長なり、曰く近來社會各人みな一種の病毒に罹れり、爲に其
行爲動作悉く皮相、外飾、虛榮に流れて精神的ならず、而し
て此の病毒を掃治するには、所謂是好良藥、即ち宗教の信仰
を精神に服するの外なかるべしと▲富田英太郎氏、氏の意見
は既に演説に盡しあれば、單に其氏名をのみ披露せり▲山本
哲太郎氏、氏は勝北西高等小學校校長なり、曰く從來は宗教、
就中佛教僧侶の墮落を見て、寧ろ厭惡の念に禁へざりしも、
「統一」其他種々の教書を読むに及て、始て佛教の理の深遠高
尚にして其尊貴なることを知り、由來心機一轉、如何にも
して信仰に入らむと工夫を凝しつゝありと▲高山祐士氏、氏
は此の程まで縣會議員たりし人なり、曰く近頃政界の腐敗、
無節操、不徳、殆ど酸鼻に禁へざるものあるを慨し斷として
政治上に關係を斷てり、加之從來かゝる沒徳不義の政治社會
に東奔西走してアタラ此身の半生を夢中に經過したるを愧ち
、今此の神聖にして清淨なる會合に於て、諸君の前に懺悔を
爲すもの也、就ては今後心思を轉換して宗教を信仰すべく研
究の道程に入るべしと▲河内貞助氏、氏は勝間田高等小學校
教員なり、曰く予は從來漢學を専攻したるものなるか、如何
にしてか非常に世を果敢なみて深く悲觀に陥り、殊には天演
蒲柳の性、數々病魔に襲はるゝ毎に、或は韓退之か其壯時、
盛に佛法を排斥したるにも拘はらず却て晚年、佛教に親みた
る事跡のあるに想到して、加持よ祈禱よ立願よと、多神散漫
とり止めもなく神佛に歸信したる事あるも、昨秋以來「統一」
を讀み今復た三師の講演を拜聴して大に證る處ありたれば、

向後は統一的唯一信念を把握する事に勉むべしと▲甲田完之
氏、氏は勝田郡會副議長なり、曰く予は從來日蓮宗に稻荷、
妙見、清正公其他あらゆる迷信の夥多あるを見て大に之を厭
忌したり、されど「統一」に法話に講演に數次日蓮聖祖立宗
の本義を聽くに近て、是等の迷信が總て末徒の貪利、勸財、
邪慾の劣清に因て中世に生したるを確知したれば、向後大に
我地方の迷信を打ち攘ふべく力むべしと▲則安和一郎氏、氏
は勝北西高等小學校教員なり、曰く國民の感化、徳育の方面に
於ては、至尊の勅語以外また何物をも要せずと思惟したりし
も、宗教感化の普遍的にして且つ厚きに感ずる處ありたれば
向後は國民教育の必要上より大に佛教を研究すべしと▲影山
謙二、予は統一軍の兵卒なり、乃ち軍の大元帥たる 日蓮聖
祖の宣言し玉ひし佛教統一の大旨に對して絶對的に服従し、
復た將官たり上長官たり士官たる本宗の教家學者の指揮の下
に世間一切の無宗教者れよび淫祠邪教の教敵と闘ひつゝある
あり、而して敵を討つ須らく大將を射るべしとは是れ予を陣
頭に立つ初めに於て決定したる大方針なり、乃ち席上見渡す
處の諸士は悉く是れ我地方に於ける學者名望家乃至大勢力
家なり、予は實に從來諸君と戦ひ來りたる也と▲北村熊太郎
氏、氏は勝北西高等小學校教員なり、曰く今日斯の如き精神
的に盛大なる會合に列席したるを榮とす、以後諸君の冀尾に
附して宗教研究の途に登らむと▲有友正一郎氏、氏は農林
學校教員なり、從來曾て宗教に興味と有せざりしも今日以後
大に佛教を研究して信仰に入らむと欲すと、此時はや午后十
二時を報す、然るに尙ほ協議案の有るあり、殊に會員中には

二里半以上の遠きより來會せられたるもありて其歸路を急か
るゝも無理からぬ事なれば、是れよりは單に交名のみ止め
むとて▲忠政勘市氏▲妹尾平四郎氏▲氣賀荷室氏▲田口政藏
氏▲上田竹次郎氏▲井上清六郎氏▲石川富之助氏▲龍川昇一
郎氏▲仁木市太郎氏▲宮野恒四郎氏▲安東専太郎氏▲石川見
覺師と順次披露したり、
議事は協議の結果、本會の第二回開催地を「勝田郡勝間田」と
し、尙ほ同地の讀者中より八名の委員を推選して、開催の時
日其他開催に關する一切の事務を擧て委員に托することした
り、乃ち其委員は、

- 富田英太郎氏 額田治郎氏 額田近市氏 額田金一氏 河内貞助氏
- 武岡亦二郎氏 有友正一郎氏 三宅清四郎氏

の八氏に委嘱する事に決して散會したり
統一讀者にして尙ほ今回開催の主唱者の一人たりし、開蒙尋
常小學校校長光井喜七郎氏は、已むを得ざる事故を以て他行せ
られしが其責を塞く爲にとて左の一文を寄せられたり、

願ふに來賓諸先哲、滿場の讀者諸君、一般聽衆諸君。今日今時下野田妙法
山經王寺精舎に於て如何の狀態にあるぞ、先哲諸師如何に高論卓説、説
き來り説き去り、布雲那の快辨を以て玄妙幽邃の教旨を説明せられたるぞ
讀者諸君如何に傾聽感動油然として信仰の念を起されたるぞ、又將來本
會を如何にするの程談話したるぞ、一般聽衆諸君如何に隨喜の涙に秋を
絞りしぞ、言笑相對し和氣霽然の狀如何なりしぞ、餘興如何なりしぞ、
嗚呼余が身は鶴山城四數里の地にありし鶴首を冠して空しく想像するの
み、當日の詳細は他日足下より聞くを得む、語を寄す、滿場の諸君よ、男
子相會する豈徒ならむや、諸君幸に健在なれ、伏して冀くは足下余が不參
を恕せられ、再拜

影山懸雲居士足下

光井喜七郎

途 上 口 占
 車・上・回・頭・満・目・録
 杜・鵬・聲・理・雨・霖
 鶴・山・去・西・途・三・里
 夢・向・經・王・精・舍・飛

興門派の殘黨取方附始末

團員 小 師 子 生

一昨年二月顯本法華宗と興門派と問答對決あり其際滅亡せし興門の爲に既に吊ひ演説までなしたりしに今回其亡靈は何さまよひけん過る五月十日十一日の兩日府下南品川魁亭に於て興門法道會演説會の名の下に龜井涌溢外數名の辨士演説せり其際龜井は四個格言を論じて各宗を攻撃し尋て日蓮宗を打ち次に顯本法華宗と攻撃して經卷相承と非義なりとして曰く余がボケツトの中に何物のあるや出されば知れざるべし知りて始めて尊きなりなど珍妙なる道理の下に彼の相承を誇り又綱要中の本門の題目を明すの章の「題目とは法華經全部の總名にして則ち妙法蓮華經の五字是れ也」を切實的に攻撃し此義は述門天台流義にして日蓮上人の法義は本門壽量品の御題目なりとて勝手の切讀攻撃をなしけるが時に午後二時過たまゝ顯本法華宗よりは能仁事一師は田久保日城師及信徒の久城、中原、石川、鈴木氏等と共に傍聴しけるが余りに聞き捨てなり難きより能仁師は演壇に進んで名刺を通じかたの如く發言の手續を了して登壇し開口一番龜井氏の誑惑なる論點を指摘して顯本教義の眞意を諸氏に照會せんとて先づ彼に綱要の那點が天台の述門流なるや其意義を問ふ然るに彼は答ふるなくして却て其文意を問ふ能仁師は即ち教示的態度を以て

を割かれなば僥倖の次第に御座候由來各位の悉知の如く千葉縣下は布教には不適當と稱して今日迄熱心布教せられし人は二三の外なかりしを以て一層寂寥の姿に御座候不適當と不熱心とは何れか其の責を負ふべきものなるや嘆はしき次第に御座候近來千葉町に於ける佛耶衝突の結果各教區共少しく色めきたる模様は御座候も是れとて余り的にはならぬ事に御座候

余は統一九十七號に於ける清澄山改宗問題と上總七里法華の新聞結なる一論によりて新無名氏に滿腹の同意を表し候否單に同意なるのみならず新聞結を造らぬ迄も獨力にても本化的に靈化感染せしめんと決意せり、开は他日に譲りて論せざるも今は二三の現状を報せん、

一我が四教區は縣下中にては古くより顯本的に布教線を張られたる教區にして比較上他の教區よりは進歩したる例にして區内には此れとて學識ある僧侶はなきも布教上俱に語るに足る僧徒も多々これあり候（全縣中には非常の無信仰破道徳の俗物もあるが）特に布教員としては宗教學には素厚ある土屋日比野の兩師に舊式ながら學問的經歷ある森川師なれば他教區に比し敢て頼頼する所更に無之候本年春期巡回布教は四月五日より五月上旬まで隔日を以て結了仕り候其の間貳拾回に近き開教ありしも最も盛大とは申難き由開及候うは農業と蠶業とは此の時期を以て彼等大に盡ざるべからざる次第なればなり、而れども稍々盛會なりしは帆丘町豊岡白濱等の二村にして其の外持筆する丈の事は御座なく候今布教員の實際談に依るに有住職の寺院よりは無住職の寺院の側か布教するに

先づかの章に六段の説明を與へ總結文の四條項の大意を辨明して除るに之を論じ「已上述べたる所に三大秘法は」とあり何が故に天台すりに見ゆるぞと反問せしに彼之に至つて始め大聲なりしに打つて變り音聲は低く答辨は乱れ全く平伏の相と示す依つて經卷相承等の正意を説き示し尙ほ一層宗學と學ぶべき由を警告し説諭し壇を下らるゝや顯本萬歳の聲場にひびき途に亡靈の殘黨の演説は烟の如く散し消へ了んぬ尙ほ此演説に可笑しかりしは自ら享保年代のものなりと名乗る古本尊と出し眞疑さへ判然せざるあやしげなる物を之れ妙滿寺の本尊なりなど振り廻して攻撃せんとせしも只人々の冷笑を買ひしのみなりき亡靈的興門の殘黨の仕方こそげに惘然なれかくて其翌日同品川顯本法華宗妙國寺に於ては日蓮宗富士派殘黨退治演説會を開き聽衆無量三百名余ありしか各辨士が演題は

開會の主意
 顯門の體狀爲書なる事を立證す
 演題未定
 毒草を嚼る
 興門の邪説を駁す
 演題未定
 大慈大悲の父母を忘る
 佛敎古今の感原
 鈴木金藏
 大島真太郎
 淺尾清藏
 石川倉吉
 田久保日城
 清瀬日憲
 山根顯道
 本多日生

此にて一先終りを告げ聽衆皆感涙をどきどき退散せりといふ

上 總 四教區たより

團友 三 菊 生 報

編輯局各位四教區より聊か申送り候により統一誌上の余白

便宜を與へられし方なりと、吐何事ぞ呼々賢明なる編輯局各位閣下よ單に本教區のみならず縣下全般の思潮は驚くべき嘆はしき次第に候はずや千葉縣下は布教不適當には非して各寺院に枕を占むる所謂敎家の不熱心なる否一點僧伽の本分たる弘法なる念慮なき坊さんの多き爲めならずや、各寺院の御坊さん達今少と反省して各自か職責に鑑み尙ほ弘法の一分をだも遂ぐる能はざるものは切めてのこと布教を現實せらるゝ人を保護し或は便宜を與へ破壊主義を取らざるを可しとす諸作佛事は僧伽の常なり

余は特に通信なしたき事は客月五日にあつた法戰顛末なり夫は區内南白龜村刺金眞光寺檀家某方より出生したるものに長嶋彰なるものあり現時九州日向の國の農學校敎師を勉めらるゝ由なるか都合にて過般歸省せる由なり此長嶋彰は頻りに日蓮宗攻撃を爲すに巧みにして八方非難せる由なるか其の擊旨は四箇格言は罵詈雑言だ惡徳の毒言だ十界勸請の曼荼羅は不論理的だとか愚作だ（其の所以は天照八幡を鬼す母神杯の下に勸請せり此れ不忠君不愛國と云ふ主意にて）などと攻撃なしたるを以て大に二三信徒の激昂を醸しめ稀には感耳驚心するものすらあるに致れり一度此の増上漫の謗言を耳にせる同寺住職及檀信徒の激昂は一方ならず特に同地に篤信の名ある長嶋瀧治郎は彼れ彰とは縁戚の關係あるを以て其の謗言を再三非難して改心をさとしたるも彼れは益々氣焰を擧げて法華宗攻撃や日蓮攻撃やとなり或は甲府問答とか品川問答安土問答等を引き曲解にも日蓮宗敗北なりと論議する事屢々に及びければ同林内は顯本宗及本門宗の壇信徒多數の事とて

兩宗の檀信徒の激昂となり遂に客月二日を以て同寺住職太田玄儒及澁治郎は他敷の決議を以て法戦を開き彼と決對せんと申込たるに彼は氣焰を擧げ余の議論に對決するもの法華宗に幾人かある特に草深き田舎坊主に於てをやの見慕にて應じたりと茲に於て兩氏は即日布教員日比野觀義師を訪へ彼れと對論演説を乞ひ度旨請願せり師は快諾を與へしかば兩氏は一層の勇猛心を生じ可成近日を以て開戦せられたり事を計りたれば師は準備さへ届かば今晚にても諾する所なりと語りたるも如斯地方開闢己來未曾有の事とて準備も要すれば明後五日とせられよと請ひて約したり之れ五月三日の午後の事なり翌四日は陰歷四月八日なれば當日になさん方妙因縁あらんと全師より注意ありしも降誕會と衝突する場合より如斯約定し此旨彼長島方に通じたり彼は茲に於て多少躊躇せる模様ありしも兩氏の請求により約則を結びたりと云ふ蓋し彼は多少の唯物的小智に依りて宗教を蒙昧なりと稱しなから彼の不真理なる眞宗の信仰を懐けるもの、如しと只これ余が兩氏より實聞せる所なり太田長島其他各信徒の熱心なる準備によりて對抗演説會場は同村中央に設備し廣告案内狀等欠點なかりしを以て當日即五日は朝餐後より續々の來聴者は集れり午前十壹時日比野布教員は來車せられたり全拾貳時森川會殿師又隨喜參列せらる時針壹時を報ず聴衆は近村各處より來集し場の内外に充ち地上停立するものすら多數なりき如斯聴衆の集まりたるにも不係一方當事者たる長島氏は來らざるなり發起者は彼の寓を訪ひたり蓋し出席を促かさか爲めなり使命は復せり曰く彼は昨夕突然用事の爲め帆丘町近在へ他出し明日ならでは

歸らずとの實際談なり余は此の一言を聞て念佛的に出來上りたる信仰の彼の心事の陋劣なるを知りたるも發起人及辨士側の激昂一方ならず既に使者を出さんとしたるも出張先不明との事には失望の外無き次第候夫れより此の報告を滿場に爲したる利那聽衆の顔色は轉一轉して彼の傲慢に似もやらず事を構へて契約を破壊せるを或は激し或は慨歎するもあり又は冷笑するあり果ては彼敗北せり後日前言の如き大慢言を再びせば大に彼を打破せんとて無聊を慰め折角の事なれば彼の出席せるものと假定して破邪的顯正的演説を請ひ度旨を通じたるに辨士に於て是れを諾せられたり、茲に於て拍手の間演壇の装置を變じ演説會とし質問隨意として開會せられぬ第一席開會の主意は太田玄儒師依て法戰顛末を報告せられ次に彼れの陋劣遁奔せるは結局墮負にして敗北をさせるものと宣言せられ次に滿場の視線を引ける演題の辨士日比野師は「東西宗教上に於ける本尊を説明し終に大曼茶羅に及ぶ」の題下に開口一番敵なきに矢を放つは丈夫の所爲にあらざる然れども事茲に及ぶ又た喋すべに非ずとて滔々數千言約參時間に渉る廣長舌評論細述各本尊を比較論評し最後に大本尊に及び十法々界の客躰は本門大本尊なりと辨了せり是れによりて本尊の尊嚴と光明と發揮し且つ云く十法界必須の事の本尊に向つて彼是れ批評を放つ者は太陽に向つて瓦礫を投ずるの愚と何を異ると長島彰の迷見を破せられたり、第參席に森川師は登壇して「大義明分の爲に死せよ」の題下に懇説論教遂に大本尊の爲めに不惜身命なれと譬説法話せられたり時に午後六時なりき點燈後閉會を告げ顯本法華宗萬歳を三稱して散會せり茲に記すべ

き事は當日の聴者は青年若くは役場吏員、學校教員、近村社寺、神職、僧侶、醫師其他相當の人種のみなりしを以て非常謝效果を得たり特に警察官が臨席せられて警戒せられたるは謝すべきなり、閉會後慰勞の小宴ありて後回を期し今一應對抗演説を開會する事を期したりと云ふ以上は法戰として未遂なるも開か顛末と略報仕り候因に本月中旬を以て第二會は開會する準備に候き彼の捨邪歸正近きにこれあり候か追て後報申上べく候草々(六月二日稿)

岡山通信

忍水兄愈々御健全奉賀候先月の致況一寸御報申上候篤信會の定期演説は六月十八日午後八時より本行寺にて開會せられたり例會には必ず野上、高矢の兩醫士交る、衛生講話のあるありて同會の光彩を加へらる殊に先々月より幹事諸氏の發企により來聴者へ法の鼓を施本せらる、等會毎に一段の整頓をなせり爲法隨喜被下度今演題辨士を御報申上候

- 正しき信仰は一大衛生法なり
- 佛教上に分説する倫理觀
- 道を糺し法を明むるは丈夫の本領
- 松崎事成
- 高矢順一
- 原田容廣
- 能仁事一

難波報片

○大阪方面の教學 本化大阪青年會の講師としては吉澤、三浦、深川、清瀬、嶋村の五師常に之が術に當り代る、正會員に對して講義し居らる、が段々見るべきものあるに至れる由にて又團員清瀬貞雄師は正會員有志者其他の人々に對し特別に自坊に於て參聴者に日々講義若しくは口授講義を實行し

つゝありとのこと又青年會附屬少年隊も追々盛んになり來り學校より歸りし後には必ず一定の教場に集合て精神的宗門的教養を受けつゝあり其成績及其れより與ふる感化の效果は頗る又見るべきものありとのこと又青年會は五の日に演説會を開きつゝありとのことなるが本月五日には大阪西部の青年會支部に於て開會せりとのことにて其日は清瀬貞雄師主任辨士として正會員を率ひて出席せられしとのこと浪花の教界願くは益多望多幸ならむことを

○大阪今日この頃の宗教界 一方には西藏歸りの河口惠海氏昨今頻りに所々の清待に應じて演説せり其説くところ多く入藏の探險談に過すと雖も西部佛教南部佛教及日本に於ける佛教の各方面に渉れる觀察を開陳し併せて佛教宗門の上に多大の刷新改革を計るべき要あることを切りに絶叫しつゝあり

▲又一面には淨土宗も近頃元氣よく布教を開始し其宗風にも似もやらず、道路布教迄も爲すこと中々の勇氣を見はし來れり又一面に於ては彼の曹洞宗が主唱となり夏期傳道及講習會を大阪に開き彼の文學博士姉崎正治君、同村上專精君、大内青巒君、文學士山内晋君、及日置默仙君等の諸氏を請し物質的現實界の發展と共に更に大なる精神的光明の發揮を待たざるべからずとして大に雄飛と試みつゝありとのこと浪花の今日この頃亦たのしきことと

○宗學研究大會 是中々に好成绩にて來學せる撰士は絶へず所々に於て布教を爲しつゝあり田中居士も時々病に罹りそれを推し通して講義等に出席せらるゝが故に病氣も靜療しがたき由にて併しこの頃は余程快氣に復せられて日夜教授に従

事し四方より來會せる人々の頭腦に活信仰を注かれつゝあり
どのこと切に祈る其主伴共に益々健全ならむことを

第二回 議事録

宗徒大會

第二回宗徒大會は、明治三十六年五月廿四日午後一時より
大阪中の島公會堂に於て開會せり、會議に先たちて議事規則
は揭示されたり、則ち左の如し

宗徒大會議事規則

- 第一條 當大會は別に議長を置かず直ちに聖祖靈鑑の冥裁を仰ぎ奉る
- 第二條 本化門下の徒は宗徒大會に參列して會衆となることを得
- 第三條 議事は出席者の過半数に依り之を決す
- 第四條 議事は午後一時開會午後五時を以て閉會す
- 第五條 議事整理の爲め宗徒大會幹事八名と擧げ幹事長一名を置く
- 第六條 幹事は便宜上議案提出者に代りて其主意を辨明することあるべし
- 第七條 發言せんとするものは幹事に申出て、順序の指揮を乞ふべし
- 第八條 可否の決議は起立に依る
- 第九條 可否同數と認めたる時又は數の認定に對し異議ありたるときは幹事長の意見を以て之を定む

第十條 緊急報告の信鈴を鳴したる時は何人と雖も發言を中止すべし

第十一條 發言は慎重にして相互の間における敬言を失ふべからず

第十二條 左の諸項に亘る事件は議せず

- 一 事件の宗派に限る事
 - 一 宗政上の件
 - 一 同門他教團を攻撃する事項
 - 一 人身攻撃に亘る嫌ある事項
- 第十三條 此規則に違背したる者は直に退場せしむ
- 第十四條 必要と認めたる應急の處置は幹事の協議を認め
て幹事長之を行ふ

以上

斯くて幹事には本多日生、中川觀秀、小倉豐三郎、伊東智靈、清瀬貞雄、深川觀察、佐野貫孝、能仁事一、嶋村日正の諸氏其任に當り、本多日生師を幹事長に推す、速記者席には中村又衛、松本海靜、石原信解、水村遼祥の四氏あり、壇上には、聖祖の御肖像を奉安せり、定刻に至るや幹事長以下着席、幹事佐野氏起ちて議員及び傍聽者に惣起立を促し、御肖像に敬禮を捧げしめ、終りて幹事長開會を宣言し、幹事能仁氏議事細則を朗讀し、次に佐野幹事當日の議事日程を報告す、即ち左の如し

議事日程(初日)

- 一 第一回宗徒大會決議事項經過報告及び將來の希望
- 一 各教團聯合大學林設立に關する實行方案

- 一 聯合大學林設立に關する各派交渉委員の撰定
- 一 宗徒大會期成同盟會々則改正方案
- 一 決議實行遊説に關する方案
- 一 次日の議事日程報告

教會

幹事長 此より日程第一項に入る

小倉幹事 昨年五月第一回宗徒大會以來今日迄の經過を報告すべし、之に先ち一言諸君の前に感謝を表し特に大阪に於ける準備員諸氏の勞を謝す、實は中央本部より準備として派遣すべき筈なるが本部亦た事務多端なるを以て、余は其代表者として開會の今日漸く下阪せし有様なり、而して第一回より盛大なる第二回宗徒大會の開かれたるは、主として準備員諸氏の熱心と信し厚く茲に感謝の意を表す、次に其報告なるものは殆ど臘を噛むか如き乾燥無味なるものにして斯る事に十分廿分の時間を消するは不快なるも余は第一回以來の責任あれば止むを得ず其一年間に於ける經過を報すべし、即ち其決議は第一條より第十七條に涉れり、第一「皇室に對する宗教的敬禮の件」は決議の當時滿場一致を以て通過せり、其實行に就ては各派管長に對して其手續の善なりしも未だ果さず、然れども精神上に於ては既に吾人の實行しつゝある處なり、

第五「帝都に本宗共有の大會堂を建設し併て共有圖書館を設る件」之は多大なる經費と時日を要することにて今猶ほ調査中なり、第六「本化門下夏期講習會擴張の件」第一回第二回は橘香會に依りて開かれ、尙昨年伊東第二回開會の時、第三回以後は期成同盟會に於て發起者たるべき事を決定せり、當時伊東に集りたる諸氏に其創立者たる事と其場所、期日等を一任せり、第七「本化門下各宗派合同統一を計り此が實行を期するの件」此件は吾人の寤寐忘るべからざるの問題なること更に喋々を要せず、されど幾百年來箇々別々に分裂せるは各々其一大理由を存すれば一朝一夕に統一すること固より困難なるべし、吾人は各派管長に對して其方法手段を勸告せしむ其回答を得たるは僅かに單稱日蓮宗、顯本法華宗、本門法華宗のみにして其他は未だ回答なし、吾人は更に諸君に之を計り圓滿なる希望を將來に全ふせんことを期するものなり、第八「日蓮宗及顯本法華宗合同統一を速に實行するの件」之は各派に先たつて合同統一の模範を示すの方針にして着々之に盡力せり而して二月の責任ある人の答辨は日宗紙上に掲げたるか如し、爾後六月に至りて顯本よりの回答に接したるも單稱よりは委員の通告に接せず、之を迫れども得ず、一月期成同盟會の催しに係る懇親會席上の決議により五名の委員を擧げて脇田師に勸告せしに師は之を甘受したり、單稱日蓮宗の委員として此時脇田師の回答ありしのみ、宗務院よりは何等の報告に接せず、令假二派の合同は困難なるも其道程を踏むべく委員を擧ぐるか如きは敢て難事非るべし、然るに

當路者未た是に一着歩せざるは吾人の遺憾とする處なり、第九「舊祖門下特志布教團體設立の件」此件は着々既に實行せり、第十「毎年宗徒大會開催の件」これは本日第二回の開催を見るか如し、第十一「純布教日刊新聞發行の件」此件に對しては吾人は種々に苦心せり期成同盟會にありては五萬圓は非常に困難なれば之を株式組織として期成同盟會よりは之を贊助することに決し本年四月廿八日發行の筈なりしも不幸にして今尙其運に至らず、吾人は深く懺悔する處なり、十七條の中特に此件を必要として、第一に盡力せしは日蓮主義を社會に發揮するに於て、先づ其機關を設立するの順序たるを認められはなり、然るに吾人の熱心の足らざると、社會の同情の少なきとは此不成立の原因をなせり、吾人は懺悔をなすと共に其初一念を達すべきことを期するものなり、五萬圓は今日の宗門に對しては多かるべきも三百萬の信徒を有するに於ては決して難事に非るべし、第十二「宗實保管方法確立の件」其宗實なるものに對て目下調査中なり、第十三「宗門教育方針改革の件」第十四「海外布教策勵の件」第十五「各教團聯合大學校設立の件」此三件は互に相連終せるものにして教育と布教とは相伴へるを以て三箇條なれども内容實質は一なるべし、本日の日程第二項は即之なり、第十六「高等宗教會議所設立の件」是また實行せず、第十七「宗徒大會決議實行期成同盟會設立の件」此期成同盟會は既に東京に於て成立せり、以上期成同盟會員としての報告は足れり、

大革命を起すべき一大機關なることを確信せり、余は元來一信徒に過ぎず然れども方今各教團の有様は遂に余か如き不肖なるものをして宗門の舞臺に立ちて盡力するの止むを得ざるに至らしめたり、若し、聖祖の精神と奉戴せば五千七千は愚が一千萬二千萬日本統一を期するも容易なるべし今日宗門の現状に満足せば宗徒大會又は期成同盟會を組織して世人を騒かすの要なし、既に吾人は各派に交渉して七百人以上の人々を擧げて各教團の名僧碩徳及び信徒中有名なるものをもつて之に當らしめたり、發起者既に七百人ありとせば今日の參會者は其大少數なるに非ずや、吾人亦生活の事業あり、會亦多端の費を要す、而して同盟會の内容は殆ど之を諸君の前に發表するに忍びず、かゝる困難なる同盟會にて前途有望なる活動を演ずるに於ては吾人の決心と諸君の責任とは益々重大なるを知るべし、吾人は非常なる一大決心を以て同情者なきときは余一人にても之を代表し斃れても尙且つ止まざるべし、若し期成同盟會斃れたらば不肖なる余にとりては敢て不名譽とせざるも、各教團知各なる大徳の名をけがす者にあらずや、是余の熱誠を以て諸君に期待する所以なり以上報告及び余一箇の意見斯のことし

清瀬幹事 日程第二「各教團聯合大學校設立に關する實行法案」細則と朗讀す左のことし
(細則省略)
 説明 各派の合同は異議なし然れども實行するに就ては根底よりせざるべからず、即ち布教と教育とは常に同一歩調

ならざるべからず、故に先づ教師となるべき僧侶を作りそれをして各々統一の主義方針に進ましめざるべからず、故に各派も統一するに先ち大學林を建設すべきなり、而して各派の本山は多く京都にあるを以て、大學林の位置は京都と定むべし若し各教團中に異議を狭むものあれば之を除きて苟も、聖祖の主義を弘布するの志を同ふする宗派のみにて最初之を建設し遂に各派聯合の實を擧るに至るを計るべし、次に教師は各教團より撰出すること、次に學生の員數を限りて撰出すること、次に學資を給與すること、次に毎年度句の間寺院住職を集めて、宗學の研鑽、實地布教の練習をせしむること、次に土地撰定等の細則は更に協定せんため二名の委員を撰ぶこと、之を實行するに就き大會より交渉委員を出して直ちに實行に着手すること、此等の順序に依て本按の成功を期すべし

三百四十六番 本員は議事日程の變更を望む、最も緊急なる動議あり、うは昨年宗徒大會に於て第一に決議したる「皇室に對する宗教的敬禮」之れ神聖なる問題なり而して今之れを等閑にするは、皇室に對し奉り宗徒の本分として甚だ不敬なるものなり、宗教家として、皇室に對する禮式なくんば禽獸に等し、然れば何事とも議せざる前に於て先づ此件を先決として議すべし、以上之を要するに、議事日程を變更し第一に之と可決し而して一日も早く之を實行せんことを望む、先づ順序として至急管長に對し勸告狀を發すべく着手すべし、勸告狀と此議場に於て今之と起草し投函も何日と確定することを望む、禽獸的宗教野蠻的宗教にして

日刊新聞や大學を云云するも何の功かあらむ
 幹事長 議事を變更するの必要なし、今提出せし日程第二項に就て議定すべし
 二百七十六番 本員は幹事長の獨斷を以てせずして三百四十六番の提出せられたる緊急動議に就て日程變更の賛否を滿場に問ふことと望む
 幹事長 日程變更には賛成者なきを以て變更するに及ばず且つ第二項議事の中途に於て日程を變更するは議事上不都合なり(議場日程變更を呼ぶものあり)
 二百九十番 余は日程變更の要を認めず、聯合大學林の件に就き合同とせずして聯合とせしは文字上何等の意味あるかを問ふ
 清瀬幹事 文字上何等の深き意味なし
 二百九十番 聯合大學林の名稱を改め合同學校と名け實行方面に親しからしむべし、只た學校と言へば大學、中學、小學を兼ねるの位あり
 能仁幹事 聯合大學の文字にては實行上難しとは不可なるべし、然れども清き意味の文字を要す、聯合とするが不可なれば合同とするも妨げず、されど大學の文字に大に要あり故に合同學校と更ゆるの必要を認めず
 二百九十番 若し大學に限るとすれば財政の設備をも計算あるべき筈なり
 幹事長 注意すべし、是れ第二讀會に於て議すべき事なり、大學の文字も比較上の文字にて中學程度をも含むべし、先づ第一に本按は議題として成立すべきや否やを先決すべし

議題とすべきことに就て賛成者は起立すべし

(起立者あり)

幹事長 起立多数と認め第一讀會を終結す

此時幹事長より暫時休憩の命あり

(午後四時)

午後四時三十分開會

幹事長 休憩中幹事會の評議により先づ日程變更を満場に計るべし

小倉幹事 緊急動議日程變更「皇室に對する宗教的敬禮」提出の理由書を朗讀す

(理由書省客)

幹事長 日程變更を満場に問ふ、賛成者は起立すべし

(起立大多数、可決)

二百四十六番 「皇室に對する宗教的敬禮」の件は之か實行を速にすべく各派管長に勸告すべし、就ては此の席に於て起草委員を撰定し直ちに勸告文を作りて、五日若くは一周間以内に發すべし

小倉幹事 何名の委員を要するや詳細に書面若くは説明を望む

能仁幹事 委員は一二名位にては不足なるべし

二百七十六番 本員は時日若くは委員人數の如き凡て幹事長よりの指命を望む

幹事長 別に議論なき様なれば本案は三讀會を経すして直ちに第一讀會を以て可決すべし、賛成者は起立

(起立大多数、可決)

幹事長 委員の人數等は幹事と協議の上報告すべし、次に「聯合大學林設立の件」に對する第二讀會を開き遂條對議すべし

小倉幹事 本按細則を朗讀す(前掲)

二百八十五番 余は原按の大体に於て一の瑕瑾を認めず、故に遂條對議を省略して直ちに決議せんことを望む

(賛成の聲あり)

幹事長 (二百八十五番)に賛成のものは起立すべし

(起立少数)

二百七十六番 議場廣大にして聞へざるものあり、斯る好議題は宜しく速寫板を以て細則を認め一同に配附すべし、今回の議題中最も好議題なるを以て、本員は特に幹事長に向て之を望む(賛成の聲あり)

幹事長 二百七十六番の意見は當然なれば之れを議場に計らす其議を容るべし、然し速寫板に多少時間を要し且つ本日は時間の餘裕なければ之を明日に譲るべし

(此時幹事長より、暫時休憩の命あり)

中川幹事 廿六日の懇親會を取消し明夜當場に於て大演說會を開催することに決せり(報告)

五時三十分開會

幹事長 前議題は明日に譲る事に決したれば、此に新しき議題を提出し「第三回の宗法大會を明年四月京都に開くの件」を議すべし、依て各自土地撰定等に就て意見を述べらるべし

三百五十四番 本員は京都の一人あり、京都の開會は順序と

佐野幹事 本員は幹事長に向て裁決を望む

幹事長 是にて裁決すべし原案に反對説の賛成者は起立すべし

(起立二人、満場大笑)

幹事長 原案賛成者は起立すべし

(起立大多数、可決)

右終りて幹事長明日の議事日程を報告せられ、更に本日決議の件を 聖祖の御寶前に上奏し終て閉會を告ぐ(此時午後六時)

以上廿四日



三百〇四番 余は京都なりとも何れの地なりとも熱心なる宗徒の會合ならば其土地を擇はす、されど今回の如き 聖祖御靈鑑の下に開會せし大會として秩序を失へるが如きものにてハ……

幹事長 言論中止……

伊東幹事 余は前説京都非難説の無意味なるを見る、而して特に熊本、長崎地方の人士の熱心なるを知れり、故に第三

回の宗徒大會を長崎に開設せんことを望む

二百七十六番 本員は原按賛成なり、前の非難説は取るに足らず順序として明年は京都に第三回宗徒大會を開くべし

寄贈新刊雜誌

人園新誌	第十三號	大分	同
新佛教	第九號	東京	博信教會
家庭	第三卷第七號	東京	同發行所
文の友	第二卷第七號	東京	以文會
無の燈	第八卷第七號	東京	同發行所
佛の教	第三號	東京	佛發行所
和融誌	第七卷第七號	麻布	其發行所

法の鼓に就て

「統一」を第百號から一層力を入れて編輯すると同時に同時になるべく平易のことも書くつもりですから次後は「法の鼓」の記事を「統一」に合併することに致します（法の鼓も時々発行はしますれど）右御承知を願ひます

七月 統一團法の鼓部

「統一」へ投書に就て

「統一」への投書は二十七字結で階書で書いて下さらないと幾ら雅作でも遺憾ながら投書にすることがあるかもしれません投書の文字の正しいのは多少の利徳がありませうわけ一は活字拾ひと校正よろこばせ、一は御本人の文面に誤字誤植がすくなくない道理なれば

統一編輯部

咄堂
加藤熊一
郎新著

最新 應用說教學講義

美製全一冊
正價金三十錢
郵金四錢

● 本の 内の 容 ●

(一) 說教の必要 說教、釋尊の本旨、入涅槃の言、
 (二) 說教の目的 說教者と聽衆、說教の困難、時機相應、說教の準備、沈毅と大膽、宗門の
 (三) 說教の準備 學問の必要、宗門の歴史、說教者の生涯、學問と宗教、(四) 說教の要素、明晰、純粹、
 學習の注意、讀書、人情の觀察、(五) 說教の要素、安當、平易、
 心(五)音聲上の要素、統一、調査、變化、發音の關係、言語の六
 組立上の要素、一致、順序、進取、倫理的分類、演
 組立上の要素、佛敎、演說上の誤過、形式上の要素、(七) 說教
 の組織、贊題の目的、贊題の種類、贊題の選擇、(八) 法說、法說の
 組立の三格對照、反復、層進、駁、(九) 序說、序說に結勸序說、談話、
 論に對する、ノックル氏の注意、(十) 譬喩、譬喩の効用、譬喩の例
 序說の規則、爲法不爲身、十譬喩并に因縁、譬喩の効用、譬喩の例
 松江敎話、結勸の規則、(十一) 緣、緣の効用、陳腐、新、(十二) 說教の修辭、
 緣の規則、大内青龍の註、(十三) 說教の趣味、趣味とは何ぞ、優美詩、
 修辭の規則、三人作用、(十四) 說教の材料、腹稿、(十五) 說教の模範、
 練習の注意、態度、說教の時間、(十六) 說教の模範、模範の必要
 例、說教の語調、青年傳道、婦女傳道、軍隊傳道、軍傳道に關する
 書籍の出版せらるゝもの、汗牛充棟も管ならずと雖、多くは
 説教、演説の筆記にあらざれば、其材料となるべきものを蒐集
 したるに過ぎず、未だ說教 其心得となるべき要件を組織的に
 練習の根本に立ち入りて、著者多年心之に傾け東西論理修辭の原則を
 の諸書を探り親しく名家の實驗談を聞きしむべきやう例を挙げ模範を
 法に關する諸書 實際に應用せしむべきやう例を挙げ模範を我
 國說教學の嚆矢 容の一斑を知れ、
 書を學ぶものには、法あり、法に則てなり、法に則てなるもの
 劍を學ぶものには、法あり、法に則てなり、法に則てなるもの
 説き此則を示して、可憐反覆、何人と雖、一讀以て應用自在なら
 しむるを得べし

東京市飯倉町五丁目 森江書店發行 電話新橋二九七二

御

雛

人形

東

者

人

形

御注文に依り調製致候

東京日本橋通り十軒店

久月本店

中原福藏

(電話本局二千三百八十二番)

岡

商服吳

店本屋柿

店主 太郎 (電話二六〇番)

柿屋 店 (岡山市上之町)

柿屋太物店 (岡山市上之町)

柿屋南店 (岡山市上之町)

柿屋北店 (岡山市車町筋)

柿屋鼈甲店 (岡山市中之町)

暑中御見舞

松尾英四郎

佛旗六金色調進所

種形別	並品製	上品製	新友仙	本友仙	染抜
在家用	廿二錢	廿八錢	卅五錢	五十五錢	
寺院用	四十三錢	五十錢	〇	一圓三十錢	
同極大	七十五錢	八十八錢	〇	二圓二十錢	

右外別大特大最大數種●國旗本友仙染抜四十五錢
 御寺院用御幕●唐縮緬紫幕●天竺木綿及五郎丸白幕
 京都市油小路魚柳南 御本山御用調進所

六社同盟購讀料滯納者處分法

雜誌購讀料を滯納し遂に其支拂を果さざるものは各社互に其姓名及事由を通告し其甚しきものは之を同盟各紙上に揭示することあるべし
 明治卅五年八月二日伊豆伊東に於て之を決議す
 日宗新報 教友雜誌 妙
 北友雜誌 日本之柱 統 一宗

廣告

明治三十五年三月本宗有志會員が教學の振興と宗務の廓清を企圖したる結果端なく八名の刑事被告を現出するの不幸を賸たり、爾來滿壹ヶ年を経過したる今日公明なる司法官の裁決により青天白日の光明を仰く事を得たるは單り被告となりし諸君の幸榮耳にあらす宗門の爲に慶賀すべき事と信ず依ては祝意を表する爲め紀念冊子を刊行し普く同信の僧俗に願與せんとす庶幾慈仁なる諸君微衰の存する所を洞察せられて應分の淨財を義捐あらん事を祈る
 一 紀念冊子の内容は三種に分類す
 甲 被告となりし諸君が教義上の執筆
 乙 篤志諸君の寄稿せられたる論文及祝詞文藻等
 丙 事件の顛末
 一 紙數限りあるを以て寄稿の論文は三百字内外とす
 一 原稿べ切を八月十五日とす
 一 義捐金及原稿並に照會等は千葉縣山武郡豐成村菱沼法華寺 笹川眞應宛送附せらる可し
 一 淨財義捐者諸君の姓名及金額は冊子の卷末に報告すべし

千葉縣有志者

百號に就て

來月の本誌は其齡百壽に滿つ、人は彼の流行の揚言の烟化せられんとし日一日迫り來る暑氣に蒸熱せられんとする頃日、吾曹何を好んでか殊更に飾言大語して百齡を迎へんや、さりとは云と教義統一を以て任ずる吾誌、亦一の紀念として多少の清裝を爲さずして可ならんや、吾團聊豫期するものあり讀者請ふ之を待て

注 意

一 百號に論文祝文詩歌等御寄稿被下候方は七月末迄に願ひます(月末迄日ノ)
 一 百號掲載は紙面の限りあれば長編ものは遺憾ながら御斷り小さくとも金剛石的のもの苦心意匠の凝つたものを願升
 一 購讀者にして餘分人用の方は豫め申入置被下度候

統一團編輯部

團告

(毎月補助金に付)

本誌全國各停車場待合室備付に對し其舉を賛し毎月補助金を
申込まれし奇特家は左の如し

岡山市 久城茂太郎殿
姫路市 中村福七殿
東中市 中藤金太郎殿
神戸市 齋藤金太郎殿
吳市 木村孝殿
品川市 大島良太郎殿
岡山市 篤信會幹事殿

千葉縣内左の各區本誌購讀料集金の義今般左
の各師へ依囑候間何卒諸師の内へ御拂込被下
度願上候也

第三教區 長生郡押日來光寺 山田日廣師
第四教區 全郡澁谷行光寺 前田日應師
第六教區 山武郡清名幸谷東光寺 草切榮玉師
第七教區 全郡御門妙善寺 飛山日甫師
他教區は追て依囑人名報告可致候
明治三十六年三月

統一團發行所

御斷り
本號は記者用の爲め編輯相をくれ發行遅延の段平に相謝し申
候

一本誌代金不納の諸君は至急御送金ヲ乞
一雜誌交換 寄稿共移轉先へ願升

一本誌は毎月一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊八錢十二冊前金八十六錢廿四冊前金一圓七十錢郵券代用は一割
増但五厘切手を其とす
一購讀申込の節は住所姓名を階書にて認めらるべし
一爲替局は淺草區北松山町として御振込の事
一本誌は別に領收書を發せす但し領收證を要する向は返信料を封入するべし
爲替振込の節拂渡濟通知料貳錢を振出郵便局へ納付すべし
一廣告料は五號活字廿七字詰每一行金八錢なり

明治卅六年七月十五日印刷發行

發行人 井村恂也
編輯人 山根顯道
印刷所 鈴木暉學
北澤活版所

東京市淺草區南松山町四十五番地

統一團

統一

第百號要目

- 本誌百號略歴史……………記 者 窪田純榮
- ▲統一の第百號を祝す……………本多日生
- 統一第一百號の祝筈に臨みて本團の旨趣及び前途の施設を述ぶ……………はなぶさ生
- ▲統一百號の歌……………金山猪人
- 柳下談片……………本末等史
- ▲究竟庵雜記……………關田佛城
- 日蓮大聖人(第十回)……………窠堂散史
- ▲人壽百歲……………村上貞藏
- 同盟會三顧問に呈す……………糸 葉
- ▲夏の夕……………高田日暢
- 慷慨錄……………海老澤乾樹
- ▲救濟の舟……………記 者
- 中央統一團友會概況……………記 者
- ▲京都、岡山、和氣、各所通信……………數 件
- 顯本專門夏季講習會……………會 報
- ▲統一第百號を祝せる時、和歌等……………數 種
- 和氣清風……………長谷川庄

明治三十六年八月廿五日發行統一團第百號 每月一回十五日